

『寺田寅彦随筆集』 全五巻

寺田寅彦著／岩波文庫

吾人（われわれ）が日常坐臥（普段の生活）の間に行っている事でも細かに観察してみると、おもしろい物理学応用の実例はいくらでもある。ただ、それらは習慣のためにほとんど常識的になっているのでそれと気がつかないだけである。（〔物理学の応用について〕随筆集第4巻の抜粋）

この文章を書いた寺田寅彦（以下寺田博士）は、今から約80年前、明治後半から大正の時代に活躍した、日本を代表する物理学者のひとりです。寺田博士は18歳のとき、熊本の第5高等学校（旧制高等学校：現在の大学の1・2年生に対する教養課程に相当）に入学し、ここで自身の人生を決める2人の先生に出会っています。一人は、数学と物理学を教えていた田丸卓郎先生で、寺田博士はこの方から物理学の面白さを学び、物理学者への道を歩むことになります。そしてもう一人が、英語を教えていた夏目金之助先生（後の夏目漱石）です。

初めて尋ねた先生の家は白川の河畔で、藤崎神社の近くの閑静な町であった。「点をもらいに」来る生徒には断然玄関払いを食わせる先生もあったが、夏目先生は平気で快く会ってくれた。そうして委細の泣き言の陳述を黙って聞いてくれたが、もちろん点をくれるともくれないとも言われるはずはなかった。とにかくこの重大な委員の使命を果たしたあとでの雑談の末に、自分は「俳句とはいったいどんなものですか」という世にも愚劣なる質問を持ち出した。（〔夏目漱石先生の追憶〕随筆集第3巻の抜粋）

寺田博士は、落第しそうな友人の「点をもらう」ための運動委員（当時こんな委員があったのですね）として漱石を訪ね、そこで俳句の手ほどきを受けることで、文学の世界にも興味と視野を広げられたようです。寺田博士は、いわゆる理系でありながら文学など文系の事象に造詣が深く、科学と文学を調和させた随筆を数多く残されました。

私が初めて寺田博士に興味を抱いたのは、高専に在学していた頃、好きだった

漱石の小説『三四郎』を読み返したことがきっかけでした。なぜ漱石が好きだったかという、私の祖母がホトトギス（正岡子規が創刊した俳句雑誌：漱石の「吾輩は猫である」も連載されました）の関係者で耳学問もあり、少年時代、子規と漱石の交友に一種の憧れを抱いていました。その時に読んだ『三四郎』のあとがきから、登場する大学の若い科学者（作中：野々宮宗八）のモデルが寺田博士であることを知りました。小説の科学者、野々宮は、研究室（穴倉）で黙々と、大学が休暇の日でも光線の圧力実験をしている人物として書かれています。野々宮曰く、「僕は穴倉生活をやっていれば済むのです。近頃の学問は非常な勢いで動いているので、少しゆだんするとすぐ取り残されてしまう。人がみると穴倉の中で冗談をしているようだが、これでもやっている当人の頭の中は激烈に働いているんですよ。」と自身を語っています。私は初めて『三四郎』を読んだとき、なるほど科学者というのはこういうものか、と妙に感心したことを覚えています。この野々宮の言葉だけをみると、この科学者は現実世界とは隔絶された人物のような気がします。しかし小説を読み進めていくとそうではなく、また作者である漱石の、野々宮に対する目が優しいことに気づきます。私は、いったい野々宮のモデルである寺田寅彦という人は、漱石とどういう間柄なのだろうと興味を持ちました。

その後、本屋で偶然、文庫版の寺田寅彦随筆集（岩波文庫）が目に入りました。恥ずかしながら、私はその時初めて、寺田博士が随筆を書かれていたことを知ったのです。手にとってみると、文庫の表紙に写實的に描かれた鳳仙花の絵（第1巻）も美しく、立ち読みもせずに直ぐにレジに行きました。後で知ったのですが、この表紙の絵は、寺田博士と同時代を生き、医学者であり詩人でもあった木下杢太郎の植物写生「百花譜」からのものでした。これも後で中身を読んでから思ったのですが、寺田博士の随筆に、これ以上ない素晴らしい組み合わせだったと思います。表紙の絵は、図鑑の絵のような客観性を持ちながらも死んだ標本ではなく、生きている植物の生命そのものを感じ取ろうとする木下杢太郎の精神性を漂わせていました。そして中身である随筆にも、淡々とした科学的な文体の中に、対象である、花や昆虫、学問や社会、そして家族や友人に対する、寺田

博士の温かみを感じられるのです。随筆の中には、漱石がでできます、子規がでできます。寺田博士は、漱石らとの師弟関係、交友のなかで、このような温かみを育まれたのかとも思います。

もし書店で、寺田寅彦随筆集を見つけたのなら、まず本の表紙を見てそのイメージのまま、目次を見て頂ければよいと思います。その目次だけからも、文学随筆だけでもない、科学随筆だけでもない、不思議な世界が広がっていることを感じられるでしょう。その世界の入り口が気に入ったのであれば、文庫本で700円程度ですので、ぜひお手元に置かれることをお勧めします。一息に読まれる必要はないと思います。随筆ですからそれぞれの文章は短く、内容は多岐にわたります。しかしこの短い随筆を集めた随筆集からは、科学と文学という表現を使った、世界とその世界を生きる人間に対する親しみと愛しさといった、寺田博士の人格を感じることができると思います。そしてあなたがそのことに共感できたのなら、それが、現代の科学者・技術者として活躍されんとする、あなたが目指す、ひとつの憧れなのかもしれません。

執筆者紹介

永森 正仁

経営情報系助教。専門領域は、情報システム工学、教育工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『寺田寅彦随筆集 改版』 1-5巻 寺田寅彦著 岩波文庫 1963-1964年
693円(各巻)

[ブックガイド目次へ](#)